

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】豊島 まり絵

【所属】(助成決定時) 東京大学大学院 教育学研究科

【研究題目】社会的相互作用による思考の性向の発展プロセス—中学校数学科の授業を事例として—

【研究の目的】(400字程度)

国際理解・協調を目指す教育においては、多様な視点から物事を捉え、複雑な文脈を理解し、他者と協働して問題解決を行う思考力の育成が重要である。このような思考には、能力やスキルといった認知的側面のみならず、思考の性向(thinking disposition)と呼ばれる情意的側面の発達が不可欠である。性向は「熱心に取り組む」、「異なる視点を考慮しようとする」、「根拠を探そうとする」といった思考に関わる意欲や態度、傾向を指し、1980年代以降アメリカを中心に研究が展開されてきた。

しかしながら、これまで思考の性向に着目して教育方法を検討した研究では、思考の性向を脱文脈的に扱っており、その状況依存的な性質を踏まえているとは言い難い。性向は人の価値や信念に根ざしており、他者や環境との相互作用によって徐々に形成されるという性質を持つ。本研究ではこの思考の性向の社会文化的な性質を踏まえた上で、子どもと教師、環境との相互作用を通じて、思考の性向が発展していくプロセスを、学びの文脈に即して明らかにすることを目的とした。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は以下3つの課題に取り組んだ。

第一に、思考の性向の育成についての理論的な検討である。これまで思考の性向の育成を扱った研究は、思考の性向を脱文脈的且つ要素主義的に捉え、教育活動の内容と方法に焦点化している点に限界があった。そこで、課題1ではハーバード・プロジェクト・ゼロの議論を取り上げ、彼らが提唱した「思考する文化の創造」というアプローチと、そのアプローチに至る議論の展開を検討した。ハーバード・プロジェクト・ゼロは、1990年代から思考の性向に着目し、子どもを取り巻く全ての環境が性向の発達に影響すると構想した研究グループである。

第二に、思考の性向を育成する授業デザインの検討である。教師によるいかなる授業デザインが、子どもの思考の性向の育成に働きかけるのかを、フィールド調査によって検討した。フィールド調査では、国立の中等教育学校1年の数学科授業を対象として、1年間の参与観察と担当教師への半構造化インタビューを実施した。観察は4~5月(第一期)、7月(第二期)、10月(第三期)、2月(第四期)に計24回行った。生徒4人1組からなるグループと学級全体の談話を、フィールドノート、教室の前後に設置したビデオ(計2台)、各グループに配置したICレコーダー(計10台)によって記録した。担当教師への半構造化インタビューは第二期と第四期に1回ずつ計2回行い、主に教師の授業観と、教師による生徒たちの変化の見立てを聞き取った。課題2では特に、学級に新しい思考の文化が創られる年度始めの時期を対象として学級談話の分析を行い、そこで現れる生徒の思考の性向の特徴と、それに対する教師の働きかけを分析した。

第三に、思考の性向が立ち現れる様相の検討である。他者と共に学ぶプロセスの中で、いかに思考の性向が現れ、他者のそれと作用し合うのかについては、十分に明らかではない。そこで課題3では、4人1組からなる生徒の学習グループの談話分析を行い、他者とのいかなる関わりの中で思考の性向が現れ、それは学びにとっていかなる意味を持つのかについて検討した。

【結論・考察】（４００字程度）

本研究から、思考の性向の発展プロセスについて以下の２点が明らかになった。

第一に、思考の性向の社会文化的な発達様式である。課題１の理論的検討からは、思考の性向は直接的な指導の対象とはなり得ず、共同体が有する信念や価値観が徐々に内化されながら形成されることが明らかになった。それを踏まえて教育実践の分析を行なった課題２では、教師が小グループで考える機会を豊富に設け、仲間との対話を通じ、数学的な議論を行う共同体の形成に働きかけている様相が明らかになった。

第二に、環境や状況に応じて達成される思考の性向の性質である。課題３の検討からは、４人１組という小グループにおける生徒同士の相互作用によって、他者や対象に開かれた思考や、課題への取り組みの熱心さが連鎖的に引き起こされる様相が明らかになった。これは、個々人が有している「開かれた心」や「誠実さ」が行使されたというよりも、他者との相互作用が「開かれた心」や「熱心さ」を集散的に引き起こした、という様相を呈していた。

今後は生徒の談話の変化に着目して分析を進めることで、思考の性向の現れの変化を捉えていくことが課題である。